

徳仁親王著

『テムズとともに、英国の二年間』 を読みながら

川本卓史

第一章 若き日の英国留学

(第一節)

一九六〇年生れの現天皇は、昭和天皇存命中の親王時代、一九八三年から八五年までの二年四カ月英国に滞在し、オックスフォード大学マートン・カレッジに留学、テムズ川の水運の歴史について修士論文を書き上げました。

帰国して八年後の一九九三年に、回想記『テムズとともに、英国の二年間』が学習院教養新書から出版され、二〇〇六年には英訳が出版された。この間に皇太子になっています。

今回は本書を取り上げますが、自ら筆を執って一人称で書いた点を尊重して、敬語・敬称は最小限度にとどめました。

また副題は「英国の二年間」ですが、本文では「英国」とも「イギリス」とも表記しますので、本稿でも両方を使用します。まずは留学時代への著者の思いを受け止めるべく、「はじめに」からの引用です。

「……とても一口では表現できない数々の経験を積むことができた。私がオックスフォードを離れてからすでに七年を経過した今も、それらは常に青春の貴重な思い出として、時間空間を超えて鮮やかによみがえってくる。その多くが今日の私の生き方にどれだけプラスになっているかは、いうまでもない」

「この文章を書きながら私の脳裏を去来するのは、オックスフォードでの楽しい学生生活である。……この短期間のうちオックスフォードで得たものは計り知れない」

と書いたうえで、「本書を私の両親に捧げたい。両親の協力なくしては、これから書き記す、今にしてみれば夢のような充実した留学生活は、実現しなかったと思われるからである」という感謝の言葉で終えます。

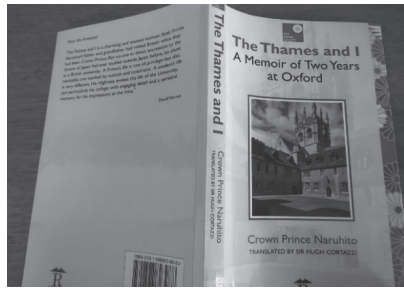
私が初めて読んだのは実は英訳です。新天皇が即位し、元号が平成から令和へ改まった二〇一九年のことです。

『The Thames and I, A Memoir of Two Years at Oxford』の訳者は、もと駐日大使のサー・ヒュー・コータツチです。私事ながら私も本書に描かれる時期のほぼ三年後にロンドン

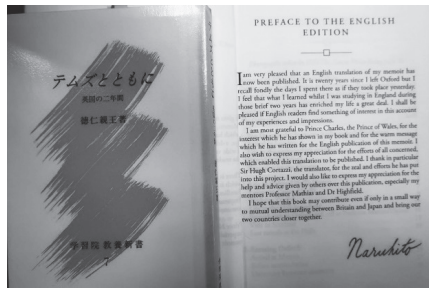
に二年半暮らしました。日英協会の会長をしていたサー・ヒューに会う機会もありました。

英訳本はチャールズ皇太子（当時）による署名入りの「推薦文」が冒頭を飾り、「鋭い観察眼、優雅なユーモアのセンス、旺盛な好奇心、そして文章力があり、楽しく興味深く読める」と高く評価します。「優雅なユーモアのセンス」とは、イギリス人の最高の褒め言葉でしょう。

「Naruhito」の署名が印刷された「英語版序文」が続きます。「留学から二十年も経っているが、あたかも昨日のことのようにいまも懐かしく思い出す」とあり、チャールズ皇太子や訳者への感謝の言葉を述べます。



本書英訳ペーパーバック版



本書と英訳本の著者の謝辞

そのあと訳者の「覚書」があり、「実は雅子皇太子妃（現皇后）が本書の翻訳を手掛けたいと長年願っていたのだが、公務多忙もあり叶わず、私がその任に当たることになったと記します。原著と英訳に十三年の間隔があります。雅子妃はこの間に少しは訳業を手掛けたのであろうか、などと考えました。

（第二節）

本書は、将来の天皇になる人物の若き日の留学の記録であり、その経験といい、本人が書いたことといい、さわめてユニークな書物であると言ってよいでしょう。

祖父の昭和天皇も父の現上皇も、海外の大学で学ぶことはありませんでした。昭和天皇は、戦後、明仁皇太子（現上皇）の家庭教師として米国からヴァイニング夫人を招へいます。夫人の回想記『皇太子の窓』によると、四年間の責務を終えて米国に帰国する旨を皇太子に伝えたときのことをこう回顧しています。「……殿下が少しの間でもアメリカで勉強なさればよいと思っっています、とも申し上げた。（略）殿下は喜びの色を顔に浮かべて、そうしたいと思う、とおっしゃった」（小泉一郎訳第三十五章）。

学習院の幼稚園から大学まで明仁皇太子と同級だった徳川義宣（尾張徳川家第二二代当主）が一九五八年に書いた「殿下の人間宣言」という文章があります。当時の正田美智子

現上皇妃との婚約発表に当たって依頼され執筆したもので、共同通信が配信し地方紙に掲載されました。

私がこの文章を知ったのは、かつての職場の先輩堀井功氏からです。徳川義宣氏は卒業後旧東京銀行に入行し、当主になる前の五年間、堀井氏の親しい同僚でした。彼に依頼されて当時の皇太子とテニスをしたこともあったそうです。

文章（引用が旧仮名遣いの場合ママ）からは長年の友への暖かい友情が伺えます。皇太子が大学生になる頃から、徐々に自由を奪われ、次第に無気力になっていくように見えたという印象をもらします。「もう以前のわれわれの仲間ではなかった」ことに寂しさを感じます。「高等科時代から自分の意思をまげられ続けてきた彼、たとへば望んだドイツ語の代りにフランス語をやらされ、理科進学の望みは政治学専攻となったやうに。最初は抵抗もし、悩みもしたが、そのたびごとに若さは奪はれ、自信は失はれ、やがてはあきらめと無気力の底に安住してしまふかと思われた彼」。

大学卒業の直前、著者はこう言うて励ましたと言います。「東洋の片隅の国の皇太子なんて問題にもしない外国へ行かなければダメだ。思ひ切って二、三年外国へ行けよ……。」

これに対して皇太子は「それは僕も考へてゐる」と答えたそうです。しかし「いろいろな事情があつて」実現することはなかった。……と書いてきた上で筆者は、今回の婚約が「自分の意思を貫き通した」ことに感銘を受けます。幼年時代の

友が戻ってきたという思いです。そのうえで、「二人は結婚したら外国へ行つたらいい」と考えます。「いまだ。思い切つてもう一度学校に行け。日本で学べなかつた大学生活を、自分の志す学問を探索してこい……」。

しかし、その後の皇太子は、海外訪問の機会は多かつたが大学での学びは実現しませんでした。

徳仁親王の先達としてあげられるのは、昭和天皇の弟秩父宮です。彼は一九二五年、親王に先立つこと五十八年前、英国に一年半ほど滞在しオックスフォード大モードリン・カレッジに入学しました、しかし、「少なくとも一年は学びたいと思つていたので、大正天皇の崩御のため、わずかに一学期で帰朝のやむなきに至つたことは、せひないことでありましたが、今でも残念に思つてゐることです」と、本人が一九四七年に書いた「英国の思い出」にあります。

このように祖父、大叔父、父それぞれの思いを受けて徳仁親王が留学生生活を全うすることが出来たという事実を、始めにおさえておきたいと思ひます。

第二章 「青春の貴重な思い出として」

（第一節）

以下、本書の内容紹介に入りますが、チャールズ皇太子が「鋭い観察眼」を評価していることは前述しました。この点

を幾つかの事例からみていきます。

初めての長い滞在で、何に気づいたか、何が記憶に残ったか、日本との違いは？……それらについての記述を読むことで、その人がどのような「眼」の持主かがわかるのではないのでしょうか。

例えば、「私」こと徳仁親王は、到着早々エリザベス女王からティーへの招待を受けて、バッキンガム宮殿を訪問しました。「英国の「ティー」とはどういうものかと思っていた私には、女王陛下自らがなさって下さる紅茶の淹れ方と、(略)サンドイッチやケーキの組み合わせに興味をひかれた」。

ここを読んで、秩父宮勢津子妃の回想記『銀のボンボニエール』にも同じような記述があったことを思い出しました。勢津子妃は、一九五三年に夫を肺結核で亡くしたあと日英協会の名誉総裁に就任し、英国を何度も訪れます。一九七四年の訪英時に、クイーン・マザー(皇太后)のお茶の招きを受けました。その時の模様を、「給仕人は一人もいなくて」、「ご自分でお茶をおいれになって、私にすすめてくださるのです」、食卓上のサンドウィッチもお菓子も「ご自身でおすすめになるのでした」と回想します。

二人ともこういうところに興味を持つのは、日本では自分でやるなど考えられないからだろうか、と私はその方が記憶に残りました。

大学に入学する前に英語の個人授業を受けるため、日本滞在の経験もあり語学学校の経営にも関わり女王付きの勤務もあるホール大佐のオックスフォード郊外にある「煉瓦造り三階建ての豪壮な」屋敷に当初の三カ月を滞在しました。

ある日、大佐の長男が村の祭りに連れて行ってくれました。彼は、自分の家では「プリンス・ヒロ」と呼んでいるのだが、お祭りの会場では「ヒロで通してくれた」。「私」はその違いに気づき、気遣いに感謝し、こう付け加えます。「日本にいてはなかなかできないことだが、自分が誰かを周囲の人がほとんど分からない中で、プライベートに、自分のペースで、自分の好きなことを行える時間はたいへん貴重であり有益であった」。

オックスフォード大学滞在中は、「先生方や学生にはヒロと呼んでもらった。ナルヒトに比べれば覚えやすいと思ったし、ヒロという言葉の響きも好きであったからだ」。

大学で何をテーマに論文を書くか、入学するまでは決めていなかった。子供のときから御所に住んで外の世界との接触が制限されていたこともあって、「道」や「交通」に関心をもち、学習院大学でもその研究を続けた。

英国に来て、テムズの美しさにひかれて、水運の歴史を取り上げることになるのだが、川を眺めた印象についてこう書き記します。

私のお会った四人の画家たち

木方元治

今、世界はアートブーム。

日本でも今まで地味に生きてきた作家たちが表の世界に現れ、東京、大阪、京都、名古屋が国際都市になる条件としてアートの受容性が大きく注目されるようになりました。

ここで取り上げる四人の作家は、言ってみれば古い時代に生き、死んでいった作家たち。どの生き方が良いかということとは問いません。

でもこんな私的な作家印象記を一度書いてみたかったことも事実です。

I 小山田二郎 (一九一四―一九九一)

私が小山田二郎とお会ったのは、二郎がラーメンを食べに行くと言ったまま家を出て、若い女性のもとに失踪した日か

ら六か月後、一人残された奥様の小山田チカエさん(彼女も画家)の語る二郎の物語を通じてでした。

小山田二郎の名前は今でこそ知る人も少なくなりましたが、戦後まもなく瀧口修造に見いだされ、タケミヤ画廊での伝説的な個展(一九五二―一九五六)は当時の日本画壇に大きな驚きと影響を与え、私が小山田家を訪れた一九七二年には何冊もの英語の画集が出る世界的な作家になっていました。でもチカエさんが語る小山田二郎はそんな作家の二郎ではなく、二歳の時にスタージー・ウェーパー症候群を発症した後遺症で下唇が腫れあがり、ケロイド状の痣が顔に残ったみにくい二郎。そんな二郎が実はとても女心をくすぐり、その内向癖にも関わらず、二郎の女癖にはとても悩まされたこと、高円寺に住んでいたころねじめ正一の実家にその絵がとても気に入られ、毎月の絵の納入・代金回収はもっぱらチカエさんの仕事だったこと、そんな最低の亭主だったけど、失踪した後の中でもその夫に恨みを覚えることなく、その作品を今でも敬愛していること。そんな話を小山田のいない応接間で彼の代表作の一つ「納骨堂略図」を前に語ってくれたのでした。それは私が高校を卒業した年の三月。これから大学生になる私にとってはあまりに衝撃的な時間でした。

小山田二郎との再会(というか出会い)はその後もかなうことなく、次に小山田二郎の名前に出会ったのは、二〇一四年の府中市美術館での小山田二郎生誕百周年回顧展。そこに

は四二年前に見た「納骨堂略図」もありました。チカエさんはその二年前、九〇年の生涯を閉じていました。

ここまでなら、私と小山田二郎の出会いとは過去に見た一枚の絵にまつわるエピソードで終わっていたかも知れません。

もう一つの出会いが、これらの出会いを私の人生にとって決定的な出会いとしたのです。

それは二〇一五年、二郎の回顧展の翌年でした。

友人の個展のオープニングパーティで友人から紹介された一人の女性画家。その名前を聞いて私は唖然としました。その名前は小堀令子。



小山田二郎 「納骨堂略図」

二郎がチカエさんとの生活を捨て逃げ込んでいった女性その人だったのです。小山田二郎は若き日に、日本画家小堀鞆音のもとに学び画家を志したのですが、父の反対にあい絵の道をあきらめかけた時期があります。小堀令子は鞆

音の姪にあたり、若い二郎にとっても近い関係にありました。令子さんを前に私は思わず四三年前の小山田家でのチカエさんの会話の持ち出ししました。令子さんはとてもびっくり、でも懐かしい話として「是非お話ししましょう」と言ってくれて、それから三時間にわたり、他のゲストから離れ二郎との二〇年の話が続きました。

私が一八歳の時に開かれた輪はこの時、令子さんの二郎との二〇年の歴史を聞くことで閉じられました。

二郎のチカエさんとの二〇年、そして令子さんとの二〇年。私が絵を見る時にどうしても人の生涯に触れてしまうことを強いる、そんなエピソードの一つになりました。

II 齋鹿逸郎 (一九二八—二〇〇七)

私が齋鹿逸郎の絵に出会ったのは一九七八年。今は無き伝説的な画廊、お茶の水画廊での個展でした。齋鹿逸郎の画業は生涯変わることなく、鉛筆と胡粉でひたすら大きな絵を描き上げていく。その画業はかつてNHKのEテレでもとりあげられましたが、生涯正業をもたず、奥さんの収入に頼って生き、自分の絵を積極的に売ることもせず、ただひたすら絵を描き続ける、そんな作家でした。

齋鹿逸郎の大規模な回顧展はその故郷である米子市美術館

歴史小説の中の「俊寛」

恩田統夫

はじめに

私は歴史が好きで多くの歴史小説を読んでいる。現在も、日経新聞連載中の阿倍仲麻呂が主人公の安部龍太郎作「ふりさけ見れば」が朝の楽しみだ。歴史小説を読むと、歴史上の重大事件の背景などの詳細を知り、「そうだったのか」と理解が深まる。ときには、多少とも歴史の知識を持ち合わせていると史実と違う点に気付き「なぜ」と訝ったりし、歴史上有名な人物たちが奇想天外な出会いをすると「まさか」と首を傾げたりもする。読後は、決まって劇的な展開に胸躍る感動を覚え、作家の創造力の見事さに脱帽させられる。

「歴史小説」は歴史上実在した人物や事件をできるだけ史実に忠実に描くものである。一方、架空の人物を主人公として、たとえ主人公が実在人物であったとしても出来事が史実とは全く関係のないものは「時代小説」と分類される。司馬遼太郎の作品は歴史小説、藤沢周平の作品は時代小説と呼ばれ、作家が同じでも吉川英治の「鳴門秘帖」は時代小説に、「新・平家物語」は歴史小説に分類される。

作家が歴史小説を書くこうとするとき、主人公や事件に関する詳細な史実が揃っていることは稀である。特に、新聞・写真・ビデオ等が発明されるより前の時代、登場する歴史上の人物の容貌・体躯・性格・服装・健康等の個人的情報や事に臨んでの胸のうち、事件当日の天候などに関する史料は欠落

はじめに

一、「俊寛」に関する史実と史料

二、「俊寛」を描いた六つの文芸作品

(一) 世阿弥の「俊寛」

(二) 近松門左衛門の「平家女護島」

(三) 倉田百三の「俊寛」

(四) 菊池寛の「俊寛」

(五) 芥川龍之介の「俊寛」

(六) 吉川英治の「新・平家物語」

おわりに

参考文献

している場合が多い。このため、作家は持ち前の想像力を駆使し空白を埋める努力が求められる。誰も分らない制約のない空白部分だけに、奔放に想いを巡らし、作家の力の発揮のしどころとなる。読者はそこに歴史小説の醍醐味を覚える。この醍醐味が味わえるかどうか、正に、史実のみを記述する無機質な「歴史論考」（歴史研究書、事典、通説のみ記述する歴史教科書等）と歴史小説との違いとなる。

私が出会った歴史小説は、児童向けの偉人伝などを別にすれば、倉田百三の「俊寛」が最初だったと思う。田舎の高校の図書館から借り出した本だったと記憶する。その悲劇性に強く感情移入させられ、初めて読んだ戯曲でもあり、今でも忘れられない作品である。

俊寛の人生は単純明快ながら劇的であり、古来多くの文人たちの格好の題材となってきた。だが、鬼界ヶ島配流後の流人三人の生活ぶりやその人間関係、俊寛だけが恩赦されなかった事情、一人残された俊寛の島での生きざまや死にざまなども史実はなく、全く分かっていない。

今回、時代の異なる傑出した六人の作家、世阿弥、近松門左衛門、倉田百三、菊池寛、芥川龍之介、吉川英治の俊寛ものに着目、その俊寛像の比較を試みた。残された史実が少ない中、六人は如何に創造力を駆使し、心に残る俊寛物語を紡ぎ出しているのか、具体的に検証してみたい。

一、「俊寛」に関する史実と史料

(一)「俊寛」の史実

「俊寛」に関し、歴史家が既存の史料を検証し歴史上の事実であると認めた「史実」（通説）を、先ず、「日本歴史大事典」（小学館）の記述を基に確認しておきたい。

一四三年生。平安末期の後白河上皇側近の僧。法勝寺執行。僧都。村上源氏の末裔で仁和寺法印源寛雅の子。治承元年（一一七七）六月一日、京都鹿ヶ谷の俊寛の山荘で後白河寵臣の権大納言藤原成親、僧西光（藤原師光、信西の弟子）、平康頼、俊寛らが平氏討滅の最終打合を行う。当初陰謀に加わっていた北面の武士多田行綱がこれを平清盛へ密告し、発覚する。清盛は直ちに兵を集め、同日夜半関係者に出頭を命じ、先ず西光を拷問で全面自供させた上斬殺、次に成親を捕らえ後に殺害、その他関係者全員も捕縛、各地へ配流した。平康頼（一一四六―一二三〇）、藤原成経（一一五六―一二〇二、成親の子）、俊寛の三人は薩摩国鬼界ヶ島に配流された。上皇と清盛の対立は決定的となるが、翌年九月、清盛の娘で高倉天皇中宮建礼門院の安産祈願の恩赦で成経と康頼の二人は赦免され帰洛した。俊寛は一人島に残され、間もなく島で死

田澤耕さんを偲んで

二〇二二年九月二十四日、法政大学名誉教授でカタルーニャ語の稀有な研究者であった田澤耕さんが六十九歳という早すぎる年齢で旅立たれました。

田澤さんは、生涯で七十冊に及ぶ書籍を日本とカタルーニャで出版しましたが、日本での出版の掉尾を飾ったのが、七月三十日に、西田書店から刊行された『僕たちのバルセロナ』でした。

田澤さんは、若き日にバルセロナ大学から博士号を取得するため、夫人と幼かった二人の子息を伴ってバルセロナで数年過ごしたのですが、そこで子供たちがどのようにカタルーニャ語を習得していったか、親子四人がどのように楽しい日々を過ごしたかを、長男悠さんの目と口を借りて語ったもので、金井真紀さんのイラストとも相まって、愉快な、こころ暖まる本になりました。

殆ど同時に出版された『カタルーニャ語 小さなことば 僕の人生』（左右社）とともに、田澤さんが私たちに残した、遺書とも位置付けられるでしょう。

『あとらす』の今号には、金井真紀さんと、『あとらす』の常連執筆者で、田澤さんと交友のあった皆さんに想い出を語っていただきます。

田澤耕さんから教わったこと

岡田多喜男

田澤耕さんに初めて会ったのは、一九七九年八月、場所はマドリッド国際空港でした。彼は二十六歳の若者で、東京銀行からスペイン語研修生として派遣されてきたのです。

私は、その半年前に、銀行のマドリッド支店開設準備委員として着任していたのですが、私の家族は田澤さんに付き添われて到着しました。それ以来四十三年間の付き合いでした。

私は、田澤さんをバルセロナの語学学校に入れました。彼が、マドリッドにいと、銀行の仕事に使われてしまうのを避けるため、彼はこれを「親心」と呼んで感謝してくれました。彼ははからずも、カタルーニャ語と出会うことになりました。

彼は、バルセロナの語学学校のつぎは、サンタンデル市のメネンデス・ペラヨ大学の講習を自分で見つけ受講したのですが、ここで神戸から研修に来ていた佳子さんと出会い、マドリッドで結婚式を挙げました。披露宴には、私も子供達ともども招いてもらいました。

マドリッドでの研修・勤務を終えると帰国し、神戸支店で働きましたが、ほどなく退職してしまいました。奥さんが大阪外国語大学のイスパニア学科に学士入学したのに触発され、自分も学究の途に進もうと銀行を辞めてしまったのです。

大阪外大の大学院に入り、山田善郎教授のゼミに入ったのが運命の分かれ道でした。スペイン語の研究テーマを決めかねていた或る日、教授に、バルセロナで研修中に、そこではスペイン語以外にも「謎の言語」が話されていることを語ると、教授が、

「それや、君、それで行こう！」

「え？」

「あんなー、最近、社会言語学つてのが流行りなんや！」
と言うわけで、教授が彼のカタルーニャ語研究の途を開いてくれたのです。

一九九一年には彼は早くも『カタルーニャ語文法入門』を刊行、早速、私にも贈呈してくれました。これが、私がカタルーニャ語の勉強を始めるきっかけになりました。そして、二〇〇二年には『カタルーニャ語辞典』を出版しました。私

は四万円する辞書を購入し、読み通したのですが、この時の様子を田澤さんはある著書にこう書いてくれました。

「Oさんから連絡があった。なんと私の辞書を通読したというのである。およそ一〇〇〇頁もある辞書を通読した人など私は聞いたことがなかった。勿論私は何度も目を通したが、それは自分の辞書だから出来ることで、他人の作った辞書を通読する気など到底なれない。そしてOさんは、私の間違いをいくつも指摘してくれた。」

その後、私は逆方向の辞書『日本語―カタルーニャ語辞典』を編纂、更に二〇一三年には『カタルーニャ語小辞典（日本語・カタルーニャ語語彙集付き）』を出版したが、これにもOさんのチェックが入った。この二〇一三年には私は還暦を迎えた。Oさんが『いい記念になったね』と言ってくれたのが嬉しかった」と書いてくれました。

カタルーニャ語関係の本で、田澤さんに付き合ったのは、去年白水社から出した『カタルーニャ文法』が最後で、まえがきに私の名前を書いてくれました。

田澤さんは、「岡田さんにはスペイン語、カタルーニャ語の理解を深めるためにもラテン語を勉強するようすすめます」と言って、自ら教授役を買って出てくださいました。「文法書」「キケローの老年について」「カエサルのカリア戦記」を教わりましたが、二〇一五年半ばに、もう時間・体力の余裕がな

は文化交流が盛んで、二〇一九年京都に「バルセロナ文化センター」がオープンしたことに触れました。生前の田澤さんはセンターの活動を熱心に応援していました。

ブログを読んでくれた友人の岡村邦彦さん（祇園町会長）が、センターまで出向き、センター長のロザリアさんに会い、ワークショップにも参加してくれました。その親切と行動力に頭が下がります。若い時にバルセロナに旅してとても良い思い出だったことも関心が続いている理由にあるようです。

田澤さんの死去にあたって、早速ロザリアさんに会ってくれました。「カタルーニヤ語の授業中にもかかわらず出てこられ、彼女も昨日知ったそうです。先生には大変お世話になり、思い出を語る会を開きたいと語り、慕われていたことが伺えました」という返事を貰いました。

京都での追悼会は十二月十六日に開催されました。

カタルーニヤに関心を持つ人たちの輪が京都でも広がっていく様子を田澤さんが知ったら、さぞ喜んだことでしょう。

バルセロナ夢の街、そして、田澤君を想う

木方元治

一九七五年、長かったフランコ時代が終わり、バルセロナ

は自由の街として新しい一步を踏み出しました。

一九七九年、田澤君は、そんな時代のバルセロナで彼の生涯を決定づけるカタルーニヤ語と出会いました。その年にバルセロナを訪れた私にとってもバルセロナは足を踏み入れた瞬間から、何か自分にとつてとつてもないことが始まる、そんな予感を与えてくれる夢の街でした。

後年、田澤君の書いた何冊もの著作を読み進めていくにつれ、当時僕が感じたとつてもないことが始まるという予感が、カタルーニヤの文化の深い伝統、長かった抑圧から解放された自由への希求から来たこと、カタルーニヤ文化が蘇っていく新しい時代が始まる丁度その時期に、僕たちはバルセロナにいたのだということを知り、何か自分の人生のとても大切な部分がそこにあったのだ、という思いを強くしたことを覚えていきます。

田澤君と私は一九七六年東京銀行に同期として入社、その三年後にヨーロッパに転勤という比較的近い道を歩んだのですが、残念ながら実際にお会いしたのは彼が文筆の道に入ってからかなり後のことで、一九七九年当時、私が見たバルセロナを彼に話すことも叶わぬまま人生を歩んでしまいました。

彼はバルセロナで出会ったカタルーニヤを生涯の道標としてその後の人生を歩み、多くの素晴らしいお仕事を成し遂げてこられました。私はその後も銀行員としての道を歩み、銀行員生活後半は主にニューヨークをベースに仕事をしてきま

した。

出来ることなら田澤君には、一九七八年に初めて足を踏み入れたバルセロナは彼の人生をどう変えたのかを聞きたかった。その後のカタルーニャ文化に関する仕事を拝見するにつけ、ずっとそう思っていました。

フランコ時代に徹底的に弾圧され続けてきたカタルーニャ彼の専門分野であるカタルーニャ語をとりあげて彼はこう語るのです。

「しかし、言語にとつて、四〇年間の空白は大きい。民主化されたからといってすぐさま本来の姿を取り戻せるものではない」(物語 カタルーニャの歴史)

忘れ去られようとしたカタルーニャ語に生涯を捧げた田澤君の生涯を思うにつけ、再び同じ問いが帰ってきます。

「一体僕たちはバルセロナで何を見たのだろうか？」

バルセロナでカタルーニャ語に出会い、そこに人生を捧げた田澤君にカタルーニャの生んだ詩人ペラ・マルクの詩を捧げて彼に対する追悼したいと思います。

生まれた瞬間に死が始まる。

死にながら、育ち、

日々、育つては死ぬ

一時も

旅はやむことがない……

歳をとつて、

死に、ただの肉塊になり果てるまで

こうして人は

定められた終わりを目指す

苦しいときも、楽しいときも

病むときも、健康なときも

「生まれた瞬間に死が始まる」田澤耕訳

田澤先生との四年半

金井真紀

「田澤耕先生、突然メールをお送りする失礼をお許ください」と始まる不躰なメールを送りつけたのは二〇一八年早春のことだった。なんの面識もない人間からの怪しいメールはこう続く。「わたくしは文筆家兼イラストレーターをしている金井真紀と申します。ただいま『サッカーことはランド』という本を企画しております。世界のさまざまな言語の、サッカーにまつわる言い回しを集めて絵本を作る試みです。たとえば「股抜き」というテクニクのことをスペイン語では「トネル」、フランス語では「小さな橋」、英語では「股の下に

ぶら下がっているものを指して)「ナツメグ」と言うそうです。あるいは元日本代表オシム監督の口癖に「水を運ぶ選手」があります。地味だが骨惜しみせずチームを支える選手のことです。そういう人をブラジルでは「ピアノを運ぶ選手」と呼ぶんだとか。……なんて事例を、各国出身の友人知人、各国語に詳しい人に聞きまくって採集しているところです。この本を作ることによって、人種、言語、宗教、風土などの多様性が表現できればと思います。そこで田澤先生、カタルーニャ語のサッカーことばを教えてくださいませんか」

田澤先生は戸惑ったに違いない。いきなりのナツメグである。バルで気持ちよくカバを飲んでいたら、隣の席の酔客からすっとんきょうな話題で絡まれた心境だっただろう。「ぼくはサッカーに詳しくないから」と、ふつうだったらそこで断るところだが、田澤先生は素人のヘンテコな質問をおもしろがる好奇心を備えた人だった。見知らぬわたしのために、わざわざカタルーニャの文化庁だったか言語庁だったかに問い合わせさせてくれて、カタルーニャ語のサッカーことばを一覧を作ってくださった。それだけで論文が書けそうな立派な資料にもかかわらず、わたしが選んだのはそのなかの「escarabat (アスカラバット)」という単語だったので、田澤先生は再度ずっこけたことだろう。ダメな審判を罵るとき、カタルーニャ語では「アスカラバット!」と叫ぶらしい。意味はゴキブリ。審判の服装が黒いからだろうか。わたしが初めて覚えた、そ

して一生忘れないカタルーニャ語はゴキブリである。いやはや。

そんな騒々しい出会いから四年、わたしは田澤先生に数えきれないほどお世話になってきた。カタルーニャ語のことわざを教えていただいたり、ご著書『辞書屋』列伝』について語っていただく会を催したり、カタルーニャ出身者を紹介してもらってインタビューしたり。なかでも「あれはいい企画だった!」と思いつきり自画自賛しているのは、二〇二〇年秋におこなった岩波書店の月刊誌「世界」の座談会だ。

中国でモンゴル語が抑圧される現状を憂う富川力道(バーボルドー)さん、トルコ政府の嫌がらせにめげずクルド語を守る活動をしているワツカス・チョーラクさん、それに田澤先生の三人に集まっていたとき「言語を守る闘い」という座談会を開いた。モンゴル人とクルド人のおふたりが、フランコ政権下を生き延びたカタルーニャ語の物語に熱心に耳を傾けていた姿が印象深い。権力者による言語の抑圧とその抵抗の歴史は、時空を超えて共振する。

その座談会するとき、田澤先生はわざわざ神戸から妻の佳子さんをともなつて上京してくださった。定期的に癌の検査、治療を続けていた頃で、おひとりでの移動に少し不安があったのかもしれない。座談会の前、早めに神保町の喫茶店でお会いして、三人でおしゃべりした。そこで田澤先生が鞆の中から紙の束を出してきたのをよく覚えている。